

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 8 日現在

機関番号：12606
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2013～2014
課題番号：25884021
研究課題名（和文）正木直彦の人的ネットワークと美術鑑賞大衆化の研究 新出の正木直彦資料を中心に

研究課題名（英文）Masaki Naohiko's Network and the Popularization of Art Appreciation

研究代表者
太田 智己（Ota, Tomoki）

東京藝術大学・美術学部・助手

研究者番号：90706714

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：正木直彦（1862～1940年）は、20世紀前半の日本で活躍した美術行政家で、日本近代美術史上の最重要人物の一人である。本研究の目的は、正木が築いた人的ネットワークを解明することで、正木が美術鑑賞の大衆化に果たした役割を明らかにすることである。研究期間中には、正木が当時のニューメディアと、そこでの人的ネットワークを利用し、美術を美術外の大衆社会にむけて開き、20世紀後半から現在までの日本の美術制度の原型を、構想・構築・実現させようとしていたことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：Masaki Naohiko, 1862-1940, was an art administrator active in Japan during the first half of the twentieth century, and one of the most important figures in modern Japanese art history. The aim of this research is to shed light on the human network that Masaki built, and to clarify the role that he played in popularizing art appreciation. This research, concluded in the academic year Heisei 25 (2013), elucidates Masaki's use of the era's new media, and how he utilized his human network in that arena to open up the world of art to wider society; it explores his efforts to plan, build, and implement a model for the Japanese art institution of the late twentieth century to the present.

研究分野：芸術学

キーワード：美術史 日本近代 制度論 メディア 美術教育 東京美術学校

1. 研究開始当初の背景

正木直彦(1862~1940年)は、20世紀前半の日本で活躍した美術行政家で、日本近代美術史上の最重要人物の一人である。とくに、近代日本美術史上の重要作家を多く輩出した官立学校、東京美術学校(現・東京藝術大学美術学部)の第5代校長を、1901年から1932年まで、長く務めたことで知られている。また、官設美術展の運営や、東京府美術館の設立、古美術の保存・研究事業にも関わるなど、20世紀前半の美術行政を先頭に立って主導した。

だが、正木個人についての学術的研究は、これまでほとんど行なわれてこなかった。作家ではなく、美術行政家として美術界の黒子的役割を担った正木は、その功績にもかかわらず、単独の研究対象にはなりづらかったためである。たしかに、上述した美術行政家としての正木の経歴はよく知られ、1990年代に刊行された『東京芸術大学百年史』では、東京美術学校での正木の事績も解説された。だが、同校を中心に美術界内の利害を調整した美術行政家という正木像が先行し、広く美術界外にもわたる正木の他の業績については、とくに研究が進んでいないのが現況である。

一方で応募者はこれまでの研究で、正木の活動期と同じ20世紀前半を対象に、美術鑑賞の大衆化の過程を研究してきた。この大衆化は、日本美術全集や、全国紙新聞社が主催する展覧会、ラジオの美術番組など、日本・全国紙・ラジオといった当時の大規模ニューメディアの登場、つまり、美術界外の社会的事情によって進展した。そしてこれが、20世紀後半から現在に至る、美術の社会環境そのものを規定していくことにもなる。応募者はこれまでの研究で、正木がこの美術鑑賞の大衆化プロセスにも関与していたことを発見し、断片的ながら指摘を行ってきた。しかし、正木側からのまとまった研究が実現していなかったため、そこで正木が果たした役割の全体像を把握しきれていなかった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、正木の著書『十三松堂日記』・『回顧七十年』、「正木直彦資料」などから史料調査を行ない、正木が築いたA. 人的ネットワークを解明することで、正木がB. 美術鑑賞の大衆化に果たした役割を明らかにすることである。

上述のように、既存の正木直彦像は、美術界内部の利害対立を調整した、穏健な調停者というイメージが強い。しかし本研究では、正木が美術鑑賞の大衆化に果たした役割を明らかにし、それにより、既存のものとは別の、新しい正木直彦像の提示を試みた。つまり、当時のニューメディアを利用し、美術を

美術外の大衆社会にむけて開いて、20世紀後半から現在までの日本の美術の社会システムの原型を、構想・構築・実現させようとした革新者という、新たな正木直彦像である。

3. 研究の方法

以上を踏まえ、本研究では次のように研究を行なった。

A. 人的ネットワークを解明する

まずは正木の人的ネットワークを、次の(1)(2)を往還的に行なうことで解明した。

(1) 関係人物索引の作成

正木の著書『十三松堂日記』・『回顧七十年』の完全な人物索引を、横断的に作成することを試みた。『十三松堂日記』は1908年から1940年までの正木の日誌、『回顧七十年』は正木の回想録で、どちらも広範な領域の関連人物が膨大に登場し、正木研究の基礎資料となる。しかしこの2著の刊本は、人物索引が著しく不備、または付されていない。2著について、新たに完全な人物索引を作成することができれば、正木という人物を、美術界の内・外にわたる人的ネットワークとともに分析できる、基盤的な資料環境が整備できる。

(2) 「正木直彦資料」などの閲覧・調査

2013年になって、東京藝術大学大学美術館に、正木の遺族から、「正木直彦資料」317点が寄贈された。同資料には、正木の遺品や履歴書のほか、様々な人物からの書簡などが大量に含まれている。また正木が著した「財産税の美術に及ぼす影響」(1937年)などからも、美術界外の一般社会に対する、正木の考えをうかがうことができる。これらの史料を閲覧・調査すれば、美術界内部にとどまらない正木の業績と、その前提となった正木の人的ネットワークが判明するはずである。

B. 美術鑑賞の大衆化に果たした役割を明らかにする

上掲A.と、応募者のこれまでの研究を踏まえ、正木が20世紀前半の日本で、美術鑑賞の大衆化に果たした役割を明らかにした。応募者はこれまでの研究で、正木が美術鑑賞の大衆化プログラムについて、明確で総合的なヴィジョンを持っていたと見込んでいる。正木は美術界内外にわたる人脈を駆使し、出版・新聞・ラジオなどのマスメディアに計画的に美術を露出させることで、意識的に日本社会で、美術鑑賞の大衆化を実現させようとしていた節があるからだ。この見込みを、上述の関係人物索引・「正木直彦資料」「財産税の美術に及ぼす影響」などを用いて論証し

た。

4. 研究成果

こうした方法により、本研究では次の実績を得ることができた。

初年度の平成 25 年度には、正木の『十三松堂日記』・『回顧七十年』を総覧し、両著の文中から人物名を網羅的に抽出する作業が進展した。この作業によって、正木の人的ネットワークには、当時のメディア関係者が多く含まれることが、具体的に確認できた。とくに、出版や新聞、そして、ラジオのようなニューメディアに関わる人々と、正木が積極的な関係を結んでいたことが判明した。これにより、正木がそうしたメディアを意識的に利用することで、日本社会で美術鑑賞の大衆化を試みていたという見込みの裏づけを、順調に得ることができた。

最終年度の平成 26 年度には、『十三松堂日記』・『回顧七十年』の人物索引を完成させ、「正木直彦資料」「財産税の美術に及ぼす影響」などの閲覧・調査を進展させた。そこから主に、次の 2 点を解明することができた。第 1 に、正木のアート鑑賞大衆化のビジョンが、円本美術全集、ラジオのアート番組、サブカルチャーのアート史物語、古美術観光、デパートでの古美術展など、当時のアート鑑賞大衆化のための諸制度の成熟と、同期しつつ構築されていたことである。さらに第 2 に、商業出版社からの円本美術全集の監修者的役割の依頼や、観光行政での委員としての登用など、それらの諸制度の側からも、正木という人物が必要とされていたことである。

上述の実績から得られた本研究の成果は、次のとおりである。

前述のように、これまでの正木直彦像は、美術界内部の利害対立を調整した、穏健な調停者というイメージが強かった。だが本研究では、正木がアート鑑賞の大衆化に果たした役割を明らかにし、これにより、今までとは異なる、新たな正木直彦像を構成できたと考える。それが、当時のニューメディアを利用して、アートを美術外の大衆社会にむけて開き、20 世紀後半から現在までの日本のアート制度の原型を、構想・構築・実現させようとした革新者という、新しい正木直彦像である。

主幹となるこの成果にくわえて、本研究で作成した『十三松堂日記』・『回顧七十年』の人物索引が、日本近代アート史研究全般に貢献できることも、付記しておきたい。既述のように正木は、日本近代アート史の屋台骨となった重要人物で、豊富・膨大な人脈を築いていた。そのため、とくに正木の日誌『十三松堂日記』は、正木以外の様々な人物の動向も知ることができ、日本近代アート史研究全般の基礎文献となっている。だが前述のとおり、同書の人物索引は実用に耐えない。これに対して、網羅的な採録を目指した本研究の新しい

人物索引は、日本近代アート史研究全般に、正木を通じた人物情報調査の環境整備という点で、幅広く貢献できると考える。

さらに前述の研究成果は、次のように発展的に応用し、研究期間内に下記の発表をすることもできた。

・美術全集の歴史

20 世紀の日本で、アート全集という出版物は、アートと一般大衆とをつなぐ、基軸メディアの 1 つであり続けてきた。アート全集は、アート作品の写真図版や、解説テキストを通じ、実作品を実見・所蔵できない一般大衆層にも、アート作品の擬似的な鑑賞体験を届けることができたからである。

そのアート全集の嚆矢となったのが、1927 年に平凡社から刊行された、下中弥三郎編『世界アート全集』全 36 巻だった。じつは正木はこの『世界アート全集』の企画初期段階で、当時の平凡社社長・下中弥三郎から、同全集の監修者的な役割を依頼されていた。企画の当初は、正木が全集全体を統括的に監修することも、実際に計画されていたようである。ただ結果的には、正木は一部の巻の作品解説を執筆したのみで、同全集全体に直接的な影響力を持つことは、なかったと思われる。だが実務レベルで同全集の編集作業を担ったのは、東京美術学校の教官で、正木の側近でもあった、田辺孝次だった。このような田辺の関わりからは、正木の間接的な関与を推測することもできる。

アート全集という、アート鑑賞大衆化のためのメディアの初発期に、正木がこうした経緯で関わっていたことは重要視するべきだろう。アート全集は『世界アート全集』以来、“家庭美術館”の構築という宣伝コピーとともに、一般家庭への流通を目指してきた。そしてそれが、20 世紀の日本で、アート鑑賞大衆化の、1 つの基軸チャンネルとなり続けてきたからである。これらの歴史的過程は、研究代表者が小学館『日本アート全集』月報誌上で、研究期間の前後にわたり行なっている連載、「アート全集の歴史」の各回（後掲）で考察し、発表した。その考察で前提としたのが、本研究で解明できた、上述の正木の活動だった。

・美術史学の社会とのつながり

20 世紀の日本では、美術史学の学術知が、アート全集、ラジオ・テレビのアート番組、サブカルチャーのアート史物語、古美術観光、デパートでの古美術展などを通じ、一般社会、大衆層に届けられていた。これらの媒体は、美術史学の学術知や古美術のみならず、日本社会でアート全般の鑑賞機会を一般大衆に開いていくための、主要なチャンネルともなっていた。こうした各チャンネルが拡充したのは、とりわけ 1920 年代以降のことだった。とくに美術館・博物館が整備される以前の 1950 年代までは、上掲の諸チャンネルが、アート鑑賞の大衆化過程で、

主軸的な役割を担うことになった。そうした歴史的経緯と現在の変化については、研究代表者が研究期間内の2015年に、単著の図書『社会とつながる美術史学—近現代のアカデミズムとメディア・娯楽』（吉川弘文館）（後掲）を刊行し、同書内で明らかにしたとおりである。

同書の論述でも、本研究の研究成果が基本的な前提となった。正木が美術鑑賞大衆化のために活動した時期は、まさに上述の1920年代以降という、各チャンネルの拡充期に重なるからである。しかも20世紀を通じ、美術史学の学術知を一般社会に届けたこれらのチャンネルこそ、正木の美術鑑賞大衆化の構想を実現させるための主要ツールになり得るものだった。上掲書の全体構想や、美術全集、ラジオ・テレビの美術番組、サブカルチャーの美術史物語、古美術観光、デパートでの古美術展といった考察対象の選定は、正木のヴィジョンや、『十三松堂日記』にみられる正木の観光行政への関与などをもとに、設定したものである。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計12件）

- 1) 太田智己「美術全集の歴史—その始まりから現在まで—第14回：美術全集ブーム—1960～80年代（4）」、板倉聖哲責任編集『日本美術全集』第6巻月報14所収、小学館、2015年、4～5頁、査読無し
- 2) 太田智己「美術全集の歴史—その始まりから現在まで—第13回：美術全集ブーム—1960～80年代（3）」、伊東史朗責任編集『日本美術全集』第4巻月報13所収、小学館、2014年、4～5頁、査読無し
- 3) 太田智己「美術全集の歴史—その始まりから現在まで—第12回：美術全集ブーム—1960～80年代（2）」、島尾新責任編集『日本美術全集』第9巻月報12所収、小学館、2014年、4～5頁、査読無し
- 4) 太田智己「美術全集の歴史—その始まりから現在まで—第11回：美術全集ブーム—1960～80年代（1）」、大久保純一責任編集『日本美術全集』第15巻月報11所収、小学館、2014年、4～5頁、査読無し
- 5) 太田智己「美術全集の歴史—その始まりから現在まで—第10回：最初の「日本美術全集」—1950年代（2）」、北澤憲昭任編集『日本美術全集』第17巻月報10所収、小学館、2014年、4～5頁、査読無し
- 6) 太田智己「美術全集の歴史—その始まりから現在まで—第9回：1950年代の少年少女向け美術全集」、狩野博幸任編集『日本美術全集』第12巻月報9所収、小学館、2014年、4～5頁、査読無し

7) 太田智己「美術全集の歴史—その始まりから現在まで—第8回：美術全集の繚乱—1930年代」、泉武夫責任編集『日本美術全集』第5巻月報8所収、小学館、2014年、4～5頁、査読無し

8) 太田智己「日本美術史研究の「科学」化志向—1930年代を中心に」、『美学』第243号、2013年、49～60頁、査読有り

9) 太田智己「日本美術史研究の「科学」化志向—1930年代を中心に」、『美学』第243号、2013年、156頁、査読無し

10) 太田智己「美術全集の歴史—その始まりから現在まで—第7回：専門研究者の参加—平凡社『世界美術全集』（4）」、山本勉責任編集『日本美術全集』第7巻月報7所収、小学館、2013年、4～5頁、査読無し

11) 太田智己「1910～50年代におけるアカデミック・コミュニティの形成」、『美術フォーラム21』第28号、2013年、116～122頁、査読無し

12) 太田智己「美術全集の歴史—その始まりから現在まで—第6回：戦略的な配本構成—平凡社『世界美術全集』（3）」、山下裕二責任編集『日本美術全集』第16巻月報6所収、小学館、2013年、4～5頁、査読無し

〔学会発表〕（計1件）

1) 太田智己「1930～50年代の美術史学—哲学から史学へ」、立教大学SFRグローバルヒストリーのなかの近代歴史学研究会、立教大学（東京）、2015年2月4日

〔図書〕（計3件）

1) 太田智己『社会とつながる美術史学—近現代のアカデミズムとメディア・娯楽』、吉川弘文館、2015年、総ページ数215頁

2) 太田智己「日本の美術史学の展開過程とその特徴」、藤巻和宏・井田太郎編『近代学問の起源と編成』所収、勉誠出版、2014年、364～387頁

3) 太田智己「美術史学」・「美術全集」、〔編集委員〕北澤憲昭・佐藤道信・森仁史『美術の日本近現代史—制度・言説・造型』、東京美術、2014年、322～326頁

〔その他〕

ホームページ等

<http://tomoki-ota.info/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

太田 智己 (OTA, Tomoki)
東京藝術大学・美術学部・助手
研究者番号：90706714